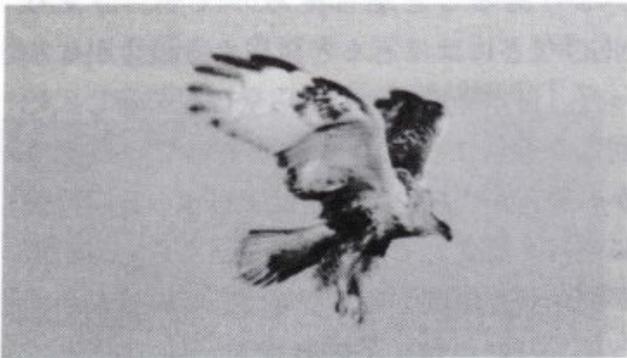




マイ スコープ

## 今、ケアシノスリに夢中

糸魚川市 鷺沢澄雄



ホバーリングするケアシノスリ

平成5年11月25日、猛禽好きの私に、上越の鳥仲間からビッグニュースが届いた。上越の休耕田にケアシノスリが2羽訪れているというのである。しかも、運が良ければ、頭上に飛来し間近に観ることも可能であるという。

数日後、期待に胸をふくらませ出かけたのであったが、観察場所を間違え、目的の鳥は見当たらなかった。再度観察地点を確認し出かけたところ、今度は天候が崩れ、暗い空にホバーリングをする姿をちらりと観たのみであった。12月30日、好天に恵まれ、今日こそはという思いで、鳥仲間とともに3度目の訪問をした。この日鳥たちは大変活動的で、ケアシノスリのみならず、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、チョウゲンボウ、ノスリ等が頻繁に姿をみせ、間近に狩りを行う場面を観察でき正に年末大サービスというところであっ

た。

ケアシノスリは、その名が示すように、跗しよの部分にまで羽毛が密生しているのが特徴であるが、体色も全体に白っぽく、特に尾羽根は白い地の先端近くに黒い帯があり、開いた状態は大変美しく、ノスリと明瞭に区別できる。また、ノスリに比べ翼が長目で、飛翔およびホバーリング等における羽ばたきもゆるやかである。狩りは巧で、ホバーリングの後急角度に急降下するのであるが、ミサゴの突っ込みを思わせる襲撃によって、見事に野ネズミを捕える場面が何度か観察できた。

青空にせん回するケアシノスリの姿は思わず見とれてしまう程美しく我々を魅了し、この環境がいつまでも残ってほしいと願わずにはいられないが、工場予定地であり、既に着工されている現状では、つかの間の楽園となりそうであり残念に思う。



# ラムサール条約釧路会議

中魚沼郡津南町 福原 毅

昨年6月9日から16日までの一週間、北海道釧路市で水鳥とその生息地を保護するための条約、ラムサール条約の第5回締約国会議が開催された。私は機会があって国内NGOのオブザーバ（見学者）という立場で全日程に参加することができた。会議の意義や成果、今後の展開などは会誌等に詳しいので、ここでは会議の雰囲気や周辺の様子などについて一参加者としての感想を少し書いてみたいと思う。

今会議は、参加者が68団体95ヶ国1200名以上という条約史上最大の規模となった。6月9日初日に行われる予定だったオープニングセレモニーが、御成婚行事と重なり政府関係者が来られないということで急遽初日と二日目の日程を入れ替え、いきなり議事に入るというハプニングがあったが、会議全体にスムーズに運営された。二日目に行われることとなったオープニングセレモニーでは国内で新規に登録した5ヶ所の湿地の認定式があり、所管の知事や市町村長が壇上で各国の代表団の拍手のなか条約事務局から直々に認定証をうけとった。この晴れやかな場にわが新潟県が加わることができなかったことが残念でならない。

会議場は、再深部にたくさんのクシロハナシノブで飾られた議長団席がまずあり、それと向かい合って前方から加盟国代表団、非加盟国代表団（特にアジア地域からオブザーバとして多くの国が招待された）、IUCN、IWRBなどの国際NGO、海外NGO、そして日本野鳥の会などの国内NGOの順に席が用意された。その後にプレス、NGOの一般オブザーバ、市民の見学者用の席がおかれ、各座席ごとに同時通訳の受信機が用意さ

れていた。公用語はフランス語で、今会議からスペイン語が加えられさらに今会議に限って日本語の使用も認められた。議案書、連絡事項等を発行する会議実施本部は四カ国語が飛びかう修羅場と化したようだ。議事は各国からの条約履行状況などのプレゼンテーションの後、質疑応答がおこなわれた。発言は前の方から指名されていくので、時間の制約がかなりあることから後ろのほう、つまりNGOなどにはほとんど発言する機会がなかった。日本野鳥の会ですら全日程を通じ2、3回しか発言できなかったのではないだろうか。発言が少ないといえば、日本の政府代表にも言えることでこちらも2回くらいしか声が聞かれず開催国でありながらぜんぜんめだっていなかった。各国の代表、NGOともに議事の進行だけではあきたらずコーヒープレイクのとき会場外のロビーではそこそこに人だかりができてコーヒ一片手に活発な議論や情報交換がおこなわれていた。

会議はあらかじめ条約事務局が各国からの報告や議案書などをとりまとめ運営するようになっていたが、なかなか予定通りにいかなかったようで毎日のように昼食時や会議終了後に緊急のミーティングがおこなわれていた。会議後半には議長団や事務局はひどく疲れているようで、かなりのハードワークをしいられたようだ。今会議は環境庁や釧路市が日本側受け入れ機関となっていて万全の体制で臨んだようだが実際に始まってみると予想をはるかに超える仕事量で結局運営本部や条約事務局などの現場のスタッフに負担がかかってしまったらしい。今後ラムサール条約にもとづく活動を展開する上で条約事務局や加盟各国との密接な連絡をとりあえるよう、ラ

ラムサール条約日本委員会などの常設機関の設置が望まれる。今会議を契機に釧路市は国際ウェットランドセンターの設立を表明した。条約登録に一步遅れをとった新潟県としては、今後このような機関と協力しながらぜひ数カ所の湿地の登録を果して条約履行に寄与する活動をすすめてほしい。

会議に並行して様々な歓迎レセプションや、野外劇などのイベントが行われた。参加者に釧路湿原などの自然をじかに体験してもらおうと、モーニングウォークとエクスカージョンが企画された。モーニングウォークは1時間から2時間のコースを歩いて自然観察をおこなうもので、市街地にある春採湖や大楽毛、千代ノ浦海岸、釧路湿原などのコースが用意された。各コースには会議場前からバスがだされ、通訳ボランティアと野鳥の会釧路支部や公園ボランティアなどがガイドについて、会議期間中毎朝おこなわれた。エクスカージョンは期間中日の日曜日に少し遠くまでバスやJRを使って一日かけてでかけるもので、釧路湿原東側、西側、阿寒湖川湯温泉、厚岸別寒辺牛湿原、霧多布春国岱の各コースが用意された。海外からの参加者には連日の会議疲れと円高によるふところの具合から期間中ホテルからあまり出たがらない人も多く、モーニングウォーク、エクスカージョンともに参加者が意外と少なかったのが残念だった。しかし、なかにはモーニングウォーク *everyday* 出てますという元気のいい人もいて会議に出ているよりもこうして一緒にバードウォッチングをしながら野外を歩くことでより有意義な交流ができたと思う。南米やアフリカなどふだんあまり縁のない国の人達と接することもできて私自身もガイドにあたった地元の人達にとっても貴重な体験であったと思う。

モーニングウォークに限らず、今会議では様々な面で市民ボランティアの活躍があった。なにしろ本会議場のロビーではロビーを

活動をする代表やNGOの人達よりもコーヒーやミネラルウォーターをサービスしたり記念グッズを販売するボランティアのおばさんたちのほうがはるかにめだっていたぐらいである。会場内のボランティアだけではなく海外からの参加者を自宅にまねくホームビジットなど市民レベルでの受け入れが早くから準備されていたようだ。商店街や飲食店街の人達にも英会話講座などがおこなわれたらしい。釧路市としてはまさに全市をあげて会議を受け入れたわけで、国際会議の経済波及効果は期待していたほどあがらなかったようだが、市民にとっても市当局にとってもめったにない有意義な体験をしたと思う。特に自然保護活動に取り組んでいる地元の高校生たちは、NGOのポスターセッションに参加したりたびたび本会議場を訪れ会議を傍聴したり各国の代表団や国際NGOにインタビューしたりと活発に活動していた。高校生で国際会議に参加できたということは彼女たち（女の子が多かった）にとって貴重な体験だったにちがいない。

今会議での市民ボランティアの活躍は各国の代表団に多大な感銘を与えた。条約事務局長は最終日前夜ボランティアをレセプションに招き労をねぎらい感謝するとともに「次回開催国のオーストラリアはたいへんなことになった。」というコメントを残した。会議が閉幕したときロビーに大勢のボランティアが集まり参加者をあたたかい笑顔と盛大な拍手で見送ってくれた。各国からの参加者もボランティアに拍手をかえしてそれにこたえた。この光景を見て、私は今回の会議の成果はこれにつきるな、という感想をもった。このおもいは私だけではなく多くの参加者にあるに違いない。

ラムサール条約はNGOとの関係を重視していて、今会議にも国内外からたくさんのNGOが参加していた。本会議場とは別の会

場（歩いて15分ほど。本会議場前から1時間ごとにシャトルバスが運行していた）に、NGOのポスターセッションのための場が設けられ集まった人達の間で盛んに情報交換やディスカッションがおこなわれていた。またNGOのシンポジウムもおこなわれ各地の湿地のかかえる問題点などが報告されたようである。私は本会議に出たためこのシンポジウムの様子を見ることはできなかったが参加した人の話では、新潟はどうしたんだ、なにをやっているんだという話が出たとかでないとか…。

このようにNGOが交流を深めることはけっこうなことであるが、なかにはこの会場にいきりびたってせっかく席が用意してあるのに一度も本会議場に姿を見せないNGOもあったようで、国内NGOの交流だけならいつでもどこでもできるだろうにわざわざ会議にあわせて釧路まで来ておきながら、この人達はいったいなににしているんだらうという印象が残った。せっかく国際会議に参加したのだから本会議で世界の状況を知り日本においてNGOとしてなにができるのか考えるのも必要なことであろう。本会議でNGOが発言する機会はすくなかったが、一日だけジャパンデーということで日本の湿地の状況について話し合われる日があった。各地から発表がおこなわれたがどうしても各地の抱える問題点、特に開発にともなう破壊とそれに対する非難に終始してしまい条約のコンセプトであるワイズユースに関する提言がほとんどなされなかったことが残念である。そもそもワイズユース自体に問題があるとか、湿地保護が急務でワイズユースということまで進めないと言ってしまうればそれまでだが、条約がNGOに対して門戸を開いているのだから加盟国である日本のNGOとしてもなんらかのアクションをしめすべきである。

ここでも日本のNGOの発言はしばしば政策批判、行政批判に陥ってしまい、自然保護

は政府とNGOが協力して進めていくのがあたりまえになっている欧米諸国の代表団からは困惑の声や、日本でもNGOと政府はなかよくやっていくべきだという発言が聞かれた。政治経済のシステムを変えていかない限り開発におけるNGO対行政の構図はなくなるだろう。

ラムサール条約釧路会議が閉幕してもうすぐ一年になる。会議前にもりあがった湿地保護の意識はどうも最近下火になったように思えてならない。釧路会議をただのお祭りさわぎにしないためにも、NGOが中心となって条約のコンセプトを推進していくべきである。特に新潟県は釧路会議までに条約登録ができなかったからといって悲観せず積極的に条約に対するアクションをおこしてほしい。どうも新潟県は湿地保護だけでなく自然保護活動が全国の動きから一步遅れがちなのが気になる。名前に湿地がついた県なのだから湿地保護に関しては全国のネットワークの中心になってもらいたいものである。それにはまず県内の湿地に関する調査研究を進め、保護活動、教育普及活動を活発に展開すべきだ。それには、県支部が大きな役割をになうはずである。

## はじめに

県支部報の前号で県内のワシタカ類の渡りについて調査の協力をお願いしたところ、たくさんの方々からデータを提供して頂きました。そこで再び県支部報の紙面を借りて、協力して頂いた皆さんならびに会員の皆さんに御報告させてもらいたいと思います。

### 1. 観察地点と個体数

図-1にデーターを得た観察地点を表-1に各観察地点での観察個体数を示しました。20箇所の地点で9月6日から11月6日まで延べ72例のデーターを得ることができました。異なる観察地点での観察では、何度も観察された個体もいると考えられますが、延べ3643羽が観察されました。そのうちサシバが全体の35%、ハチクマが28%、ハイタカ、ツミなどの小型タカ類が14%、ノリスが11%を占めています。また前号で述べた牧峠、小村峠の他に新たに中条町櫛形山、見附市桑探峠、長岡市南蛮山、小千谷市山本山などで計100羽以上の渡りが観察されました。

### 2. 種類と渡りの時期

サシバ、ハチクマ、ノスリ、ハイタカ、ツミ、小型不明の各種について観察された時期を図-2(1)、(2)に示しました。サシバは9月6日から10月11日まで、ハチクマは9月10日から10月11日までの間に観察されました。その渡りのピークは、2種とも明らかに9月中旬から下旬にかけてであると思われます。ノスリは9月10日から11月6日まで観察され、



図-1 観察場所

表-1 観察場所と個体数

観察場所	サシバ	ハチクマ	大型 s p.	オオタカ	ハイタカ	ツミ	小型 s p.
中条町櫛形山 (11)	238	186	85	6			205
上川村鍵取 (1)	1	5	1				
砺尾市桑探峠 (1)	100+						
長岡市八方台 (1)	11	6					
長岡市南蛮山 (2)	142	17		4			
山古志村金倉山 (1)	1	8					1
小千谷市山本山 (14)	402	233	10	8	57	6	8
三島町小木ノ城 (1)			21+				
越路町櫛形山 (1)	9						1
柏崎市畔屋 (1)		7					
柏崎市小村峠 (3)	41	129		4			
川口町木沢 (1)	1						1
堀之内町堀之内高 (2)			2				6
小出町青島 (3)	16	18	10	1			1
六日町櫛形山 (1)		1					
湯沢町湯沢高原 (1)			1		1		1
三和村錦 (2)	4	2					
牧村牧峠 (23)	314	406	189	17	88	5	143
板倉町関田峠 (1)	13	17					
上越市東城町 (1)		1					
計	1293	1036	319	40	146	11	367

観察場所	ノスリ	ミサゴ	イヌワシ	クマタカ	ハヤブサ	チハヤブサ	チョウゲンボウ	計
中条町櫛形山 (11)	224	1			1			946
上川村鍵取 (1)								7
砺尾市桑探峠 (1)								100+
長岡市八方台 (1)								17
長岡市南蛮山 (2)	1		1		1	1		167
山古志村金倉山 (1)								10
小千谷市山本山 (14)	68	1	2		6	6	1	808
三島町小木ノ城 (1)								21+
越路町櫛形山 (1)					1			1
柏崎市畔屋 (1)								7
柏崎市小村峠 (3)		1					2	177
川口町木沢 (1)	1							3
堀之内町堀之内高 (2)	6							14
小出町青島 (3)								46
六日町櫛形山 (1)								1
湯沢町湯沢高原 (1)	5			2				10
三和村錦 (2)								6
牧村牧峠 (23)	80	3	5		1	8	2	1261
板倉町関田峠 (1)								30
上越市東城町 (1)								1
計	385	6	8	2	10	15	5	3643

( ) 内は、観察回数

大型 s p. は、サシバ、ハチクマ、ノスリの識別ができなかったもの。

小型 s p. は、ハイタカ、ツミの識別ができなかったもの。

個体数

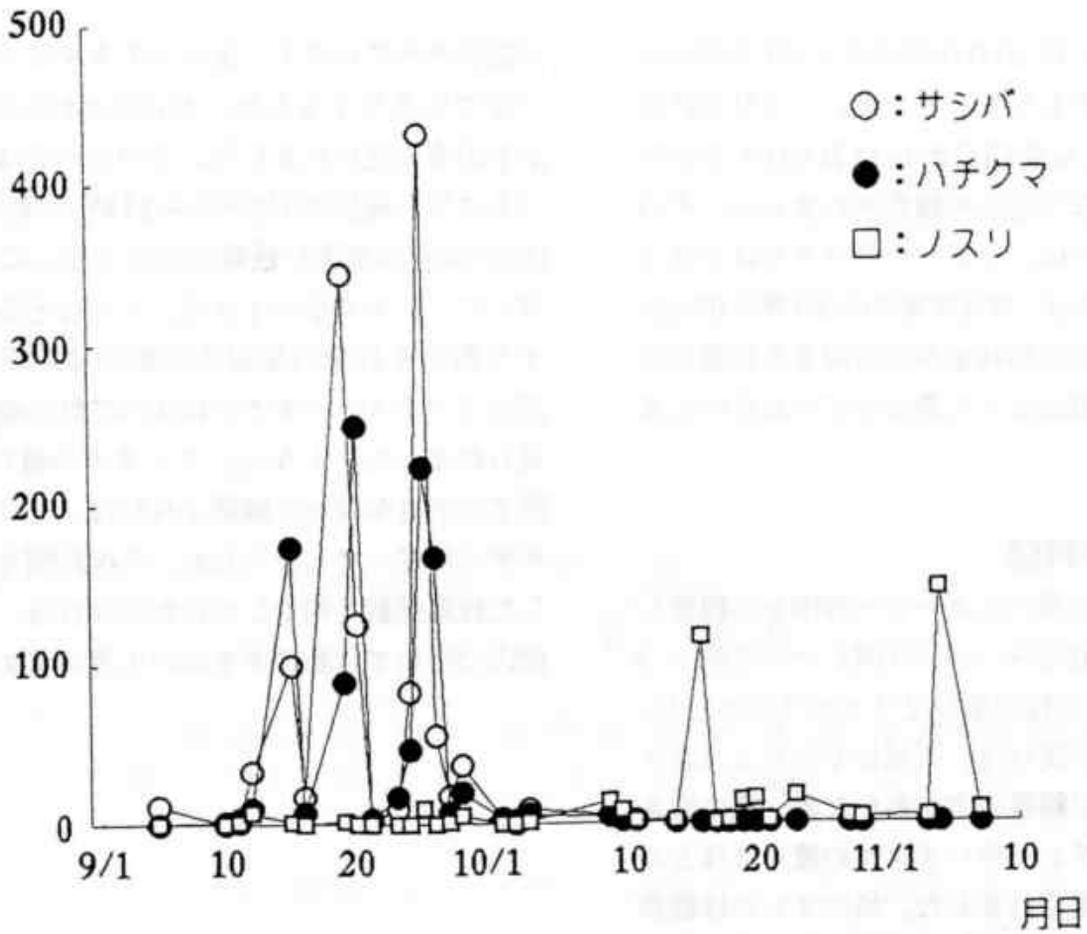


図-2 (1) 種類と渡りの時期 (サシバ、ハチクマ、ノスリ)

個体数

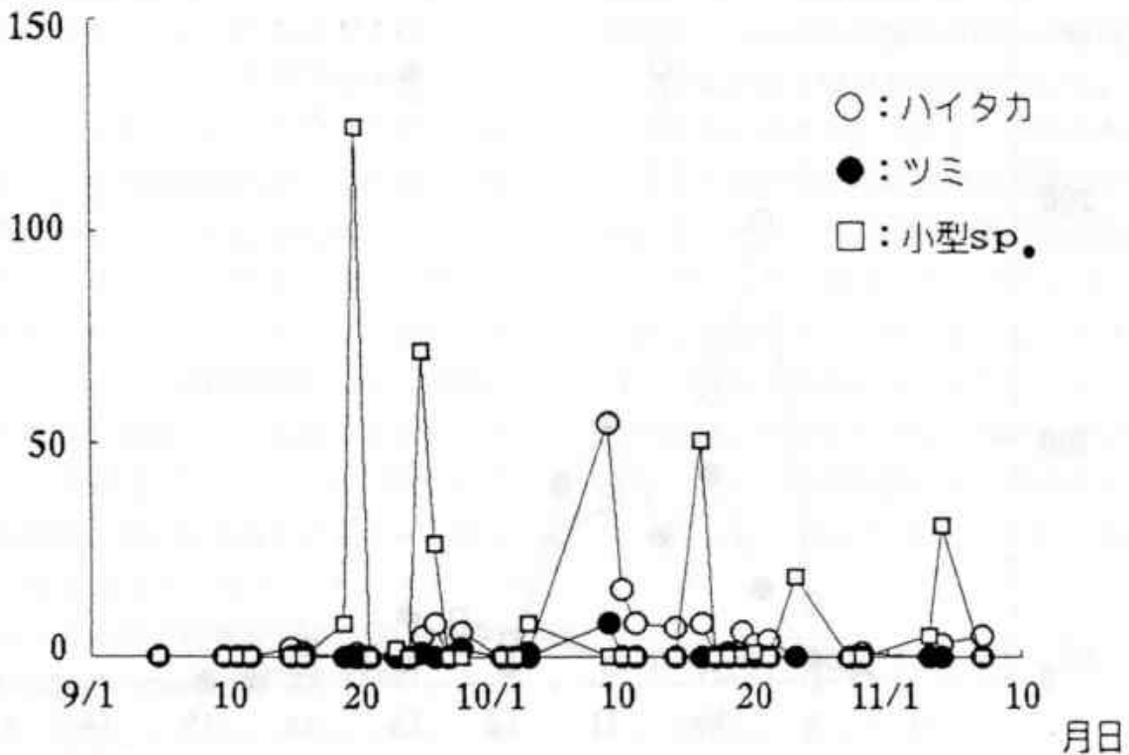


図-2 (2) 種類と渡りの時期 (ハイタカ、ツミ、小型sp.)

渡りのピークは10月中旬から11月上旬にかけて見られました。ハイタカ、ツミなどの小型タカ類は、9月15日から11月6日までかなり幅広い期間で渡りが観察されました。その渡りのピークは、サシバやハチクマほどははっきりしませんが、9月下旬から10月上旬にかけてであると思われます。このように渡りのピークは種類によって異なっているといえます。

### 3. 渡りの時間

皆さんから頂いたデータの中から観察した時間の記述があった40例について図-3(1)、(2)に30分毎の集計でまとめてみました。ワシタカ類の渡りは、天気にも左右されますし、午前中の観察の方が多いため一概に言えませんが、サシバやハチクマの渡りはほとんど午前中に見られました。特にサシバは観察個体の94%が午前中に観察され、その中でも9時から10時半までに全体の70%の個体

が観察されています。またハチクマは、サシバ程ではありませんが、全体の83%の個体が午前中に見られました。そのピークはサシバより少し遅目で9時半から11時半の間に全体の70%の個体が観察されました。これに対して、ノスリやハイタカ、ツミなどの小型タカ類はそれぞれ午前中の集中度が62%、65%とサシバ、ハチクマに比べて低い傾向が見られました。しかし、ワシタカの渡りは1回でも大きな群れが観察されれば、その割合がすぐになってしまうため、今後時間を記録した観察例数を増やしていかなければ、この傾向については断定できないと思います。

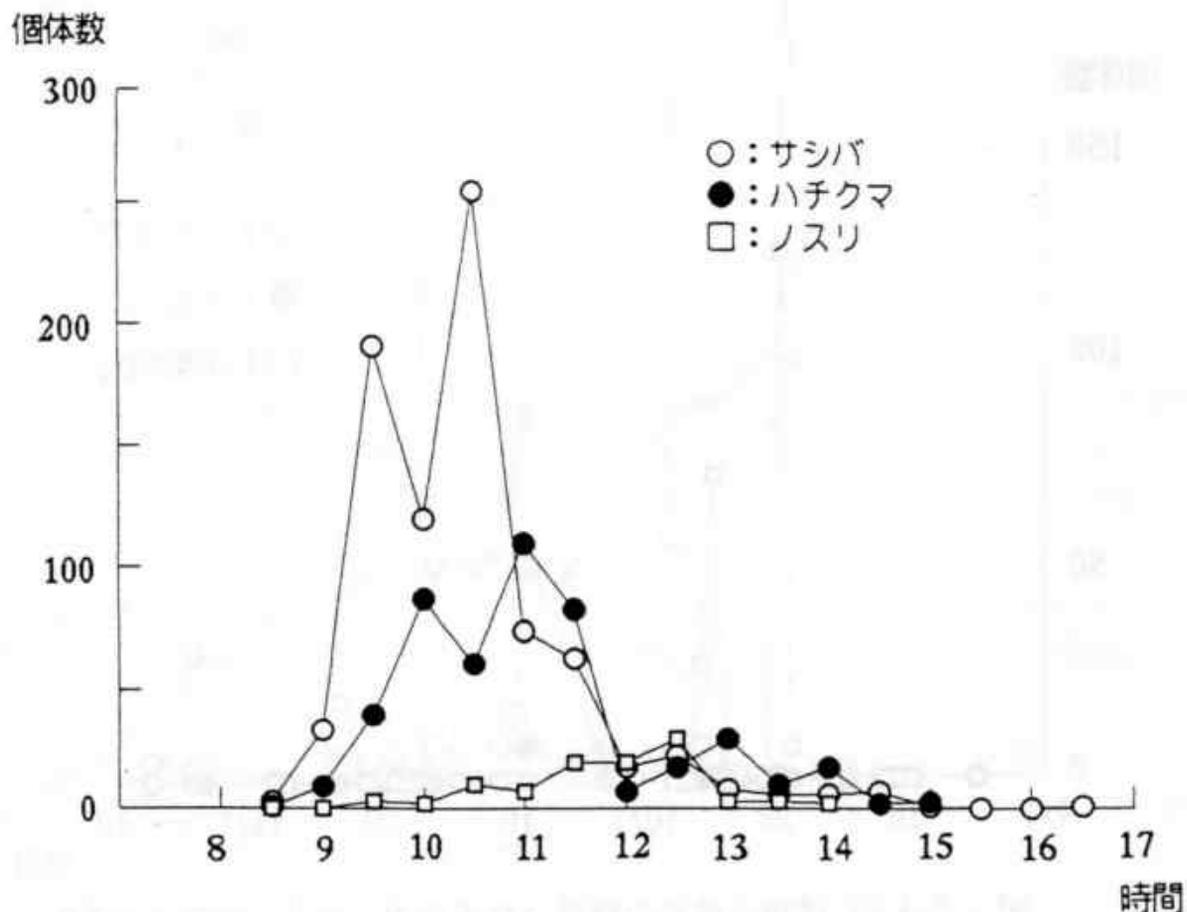


図-3 (1) 種類と渡りの時間 (サシバ、ハチクマ、ノスリ)

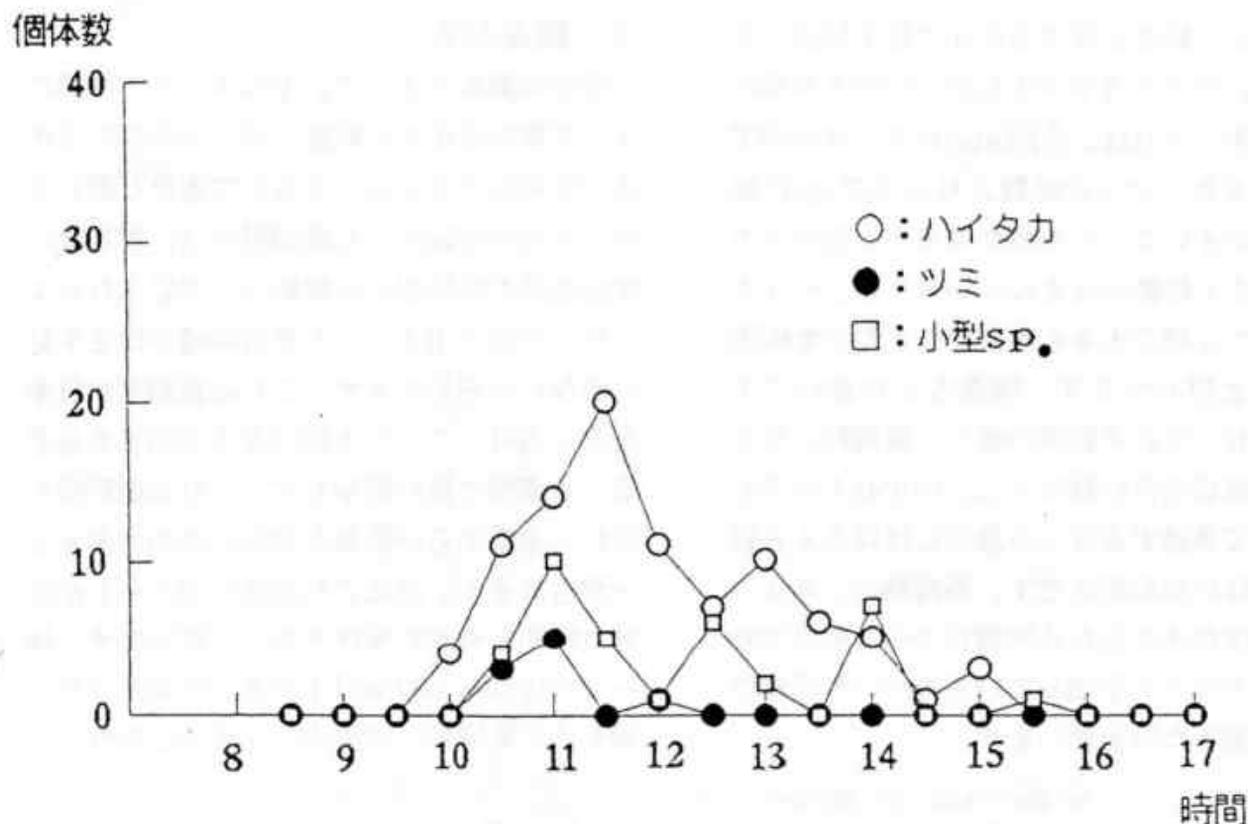


図-3 (2) 種類と渡りの時間 (ハイタカ、ツミ、小型 sp.)

#### 4. 渡りのルートについて

図-4にそれぞれの観察地点における主な通過方向を記してみました。観察地点は、上越地方と中越地方がほとんどであるため、下越地方及び下越と中越を結ぶルートについては推定するしかありませんが、県内には主に2つのルートが考えられます。1つは、中条町の楡形山から五頭連峰を経て、長岡市の東山丘陵を南下し、小千谷山本山からやや西に方向を変え川西町、津南町から関田山脈沿いに牧峠に至るルート。もう1つは三島町小木ノ城付近あるいは、越路町楡形山から柏崎市畔屋、小村峠を通過し、三和村に至るルートです。この後過去のデータから推定すると、妙高高原町池の平を南下するルートをとるのかも知れません。ただし、この2つのルートはその途中の観察記録がなかったり、観察数が少ないデータを結び付けている所も多いため、確定したものとは言えません。また川口町から湯沢町にかけての魚沼地方の観察記録もこの2つのルートとどのように結び

つくのかわからない所です。

そんな中で、9月19日見附市桑探峠でサシバ100、同じく9月19日長岡市南蛮山サシバ124、9月20日牧村牧峠126といった3つの記録が唯一同じ群れが異なる地点で観察されたのではないかと思われるものでした。サシバ以外にもハチクマ、ノスリ、小型のタカ類などで1日数十羽から数百羽の記録がいくつもありましたが、同じ群れが他の地点を通過したと考えられる記録はありませんでしたが、これは観察地点、日時ともにルートの予測をたてて設定されたものではないこと、観察地点の見通しが全ての方位についてよいわけではないこと、高空を飛ぶタカは見落しやすいことなどからやむを得ないことだと思えます。

### 今後の課題

#### 1. 識別について

ワシタカ類の渡りの中で一番数多く見られるサシバやハチクマの識別も難しいものがあ

りますが、観察を続けるなかで最も問題となるのは、ハイタカやツミなどの小型タカ類の識別です。それは、今回頂いたデータの中でもハイタカ、ツミの総数よりも小型sp.の総数の方が多いことでもわかります。他のタカより小さく特徴が見えにくいうえに、ハイタカ雄とツミ雌の大きさが近いことなどが原因であると思われます。図鑑などに書いてある、上面の色彩や眉斑の違い、飛翔時に見える初列風切羽の枚数などは、いずれもわずかな時間で通過する渡りの最中にはほとんど確認できないのが現状です。飛翔時のシルエットやはばたきなどから明確にこの2種を識別できるポイントを知っている方がいればぜひ教えて頂きたいと思います。

## 2. 調査方法

今回の調査によって、主なルート、種類によって異なる渡りの時期、渡りの規模などが大づかみながらもはっきりしてきたと思います。今回の記録からも新潟県では、愛知県の伊良湖岬や長野県の白樺峠などで見られるような一日何千羽といった単位の渡りはまず見られないと思われます。これは新潟県が日本海側にあり、ワシタカ類の渡る方向である北東から南西に長い形をしているため山形県を除いた他県からの飛来が少ないためであると予想されます。逆にこれは渡りのルートが非常に解明しやすい条件であると思います。従って今後は系100羽以上の渡りが観察された楡形山、桑探峠、南蛮山、山本山、牧峠、小

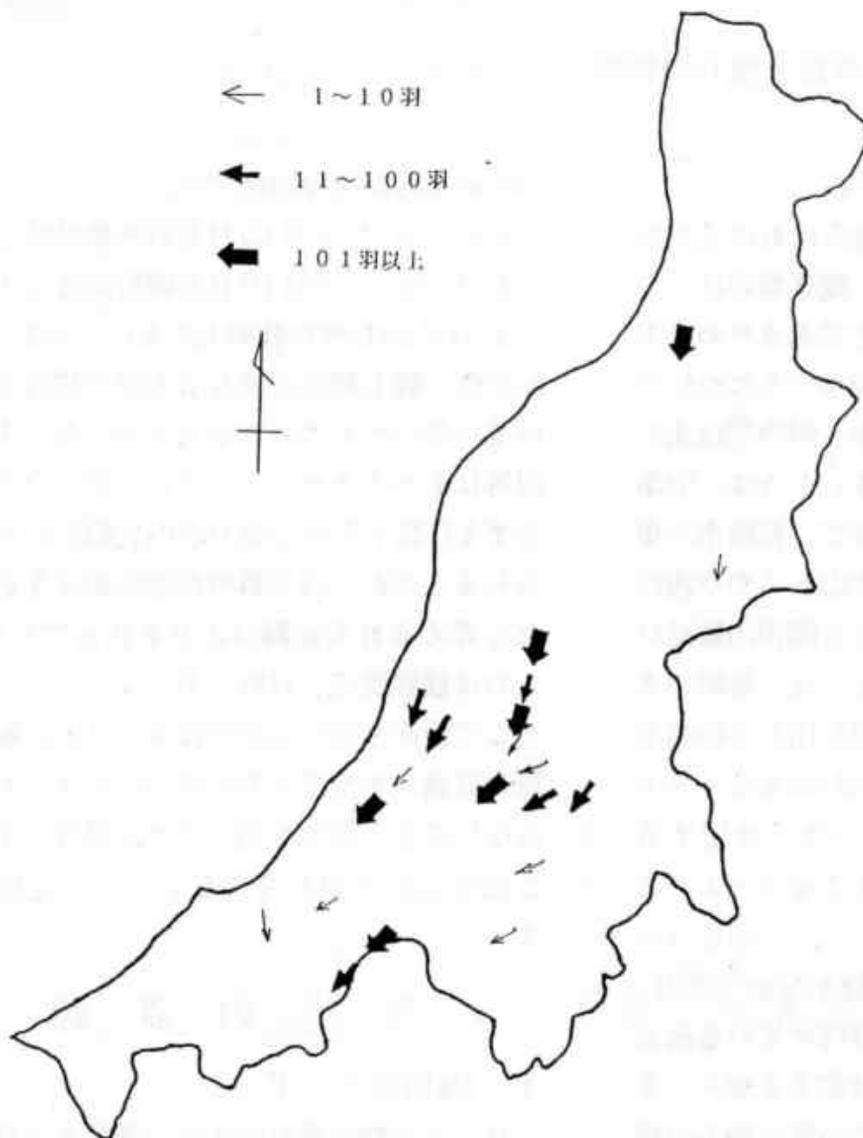


図-4 観察場所と主な通過方向

村峠を中心にして県内各地に定点観測地を設け、何日間か同じ日に調査を行うことができれば、県内のワシタカ類の渡りのルートはかなり解明されるのではないかと私は考えます。また観察例のない岩船、蒲原、新潟市近辺、西頸城などでも渡りが見られる可能性は十分にあると思います。これらの地域も含めて、今年の秋に再び調査の御協力をお願いしたいと思います。わずかな数でも観察例がありましたらぜひ教えてほしいと思います。



図-5 1993年9月23日牧峠の探鳥会 石橋一夫氏撮影

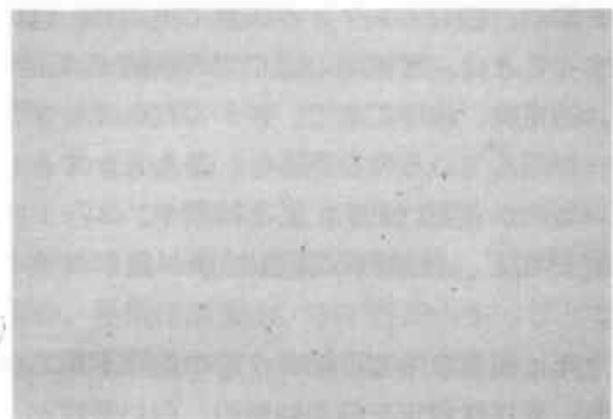


図-6 上昇気流を求めて集まるサシバ

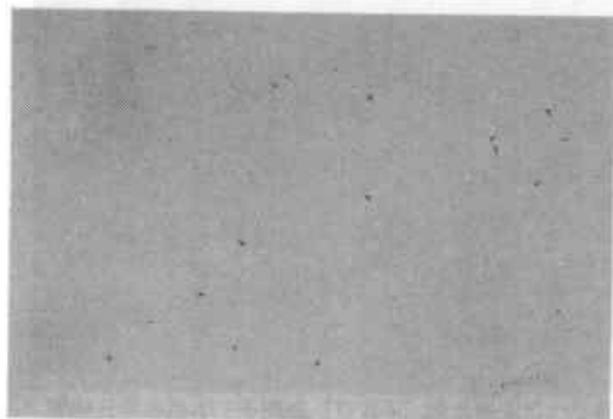


図-7 集まりながら上昇するサシバ

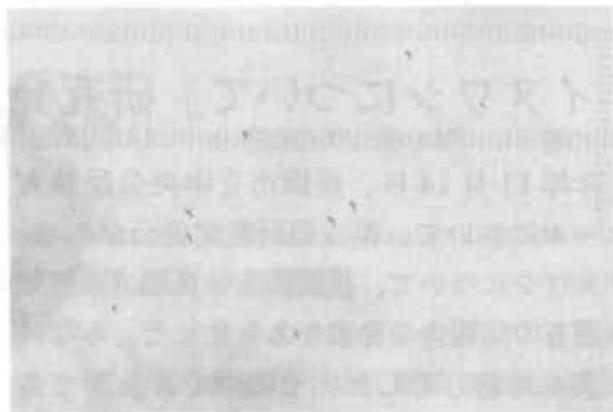


図-8 上昇後一定方向に向かって滑空するサシバ

図-6～図-8は、いずれも1993年9月25日、小千谷市山本山

長谷川誠氏撮影

この日山本山ではシーズン最高羽数が観察された。

サシバ258、ハチクマ60、オオタカ5、ハイタカ3、ツミ1、小型SP6、ノスリ1、イヌワシ1、ハヤブサ1、計336羽

## おわりに

今回の調査に関して快くデータを提供して下さった次の皆様に深く感謝します。

石井哲夫、桑原哲哉、小林成光、立野正信、中山正則、橋本肇、長谷川誠、古川弘、末崎興助、箕輪貴一、柳瀬昭彦、渡辺央。(敬称略)

## 「イヌワシについて」研究発表を聞いて 西蒲原郡巻町 佐藤 吟一

昨年11月14日、長岡市立中央公民館大ホールにおいて、県支部研究発表会があり、イヌワシについて、長岡西山の鳥類、巣箱架設調査中間報告の発表がありました。みな興味深く拝聴しました。その中で、友人であり、また私のワシタカについての師匠でもある。小島幸彦氏の、イヌワシについての発表を聞いて感じたことを書いてみたいと思います。

私と小島氏は、ワシタカ好きが縁で、7年前に知り合い以後、イヌワシの調査などに御一緒させていただき、ワシタカについて、多くの事を教えていただきました。小島氏は支部の総会や、探鳥会などには、ほとんど参加されたことがないので、知らない会員の方がほとんどだと思います。

彼は、大学時代に、サシバの研究をされ、その後、日本イヌワシ研究会で、イヌワシの調査研究や、チョウゲンボウなど、他のワシタカの研究もされており、今回の発表で、イヌワシという、鳥好きなら是非一度は見たいと思うが、なかなか会えない、そんな鳥について、研究の成果をみんなで聞くことができ企画された。事務局に感謝したいと思います。その発表によれば、全国のイヌワシの生息数は、10年で確認されたペア数で最大の値は、124ペアだそうです。この数字を聞いて、多いと思われる人は、いないと思います。10年間には、調査人数や、地域も増えているはずなのに、生息数が増加していないということはかってイヌワシが生息していた地域で、いなくなっているということです。食物連鎖の頂点に立つイヌワシの数の減少は、とりもなおさず、生息環境の悪化（リゾート開発、自然林破壊、人工林化）に他なりません。

一度でも、雪山の稜線を飛ぶ、イヌワシの雄姿を見た人なら、そこは、スキー場に変わ

るのを望みはしないと思います。

全国の10年間の繁殖成功率は、平均44%だそうです。半数以下のペアにしか、ヒナが巣立っていないということです。その数値も年々減少しているそうです。東北、北陸の繁殖成功率は、60%台で、西日本より比較的良いそうです。これは、ブナ林などの自然環境が残されているからでしょう。しかし、以前秋田県で話題になったような、スキーリゾートの開発が、イヌワシの生息地に及ぶことが懸念されます。県内のイヌワシは、41箇所が生息が確認されているそうです。この数は、多いな、と思いました。また魚沼地方の調査では、繁殖成功率は、約60%とのこと、東北、北陸と同等のようです。しかし、1991年以後、成功率は低くなっているそうです。

繁殖失敗の直接原因は、わかりづらいと思いますが、私もイヌワシの観察に出かけ、目にするのは、繁殖地の近くでの砂防ダム工事、送電線、铁塔工事、さかんにヘリコプターが飛んでいるのを見ると、なんとかできないものかと思います。工事時期や、ルートの変更など、具体的な保護対策が急がれます。

今年は豪雪の中で、イヌワシの胞卵が始められ、夏には青空を飛ぶ幼鳥の、白い斑紋が見られることを、心待ちにしています。



「畑でへびを捕えた、イヌワシの親子」小島幸彦氏撮影

## 初冬の朝日池探鳥会 新潟市 岩原アキ

朝日池の探鳥会に参加したのは、今回で2回目です。

1回目はその前の年です。バードウォッチングに興味を持ち、日本野鳥の会に入り、初めて行った探鳥会がこの朝日池でした。冬なのに快晴で暖かく、用心して厚着をして行ったら暑いほどでした。

このようにじっくりと鳥を見ることは、初めてだったので、双眼鏡から見る鳥の姿に、心が洗われるようでした。



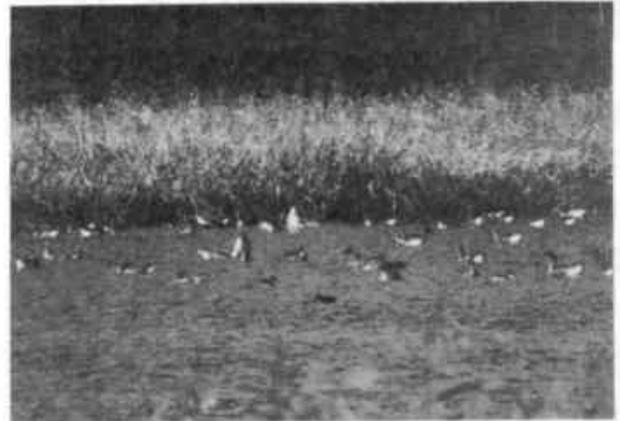
朝日池とヒシクイ、マガンの群れ

そして今回、私のお気に入りの場所である朝日池でまた探鳥会があるということで、楽しみにしておりました。

ところが、朝目覚めるとシトシト雨の音。「中止だろうか。」と思いながらも高速バスに乗りました。朝日池に近付くにつれて、雨は増々ひどくなっているようでした。

朝日池に着くと既に何台かの車がいるのが目に入り、中止ではなかったとほっとしました。しかし、前回の時とはうって変わって、このひどい雨。鳥も雨でよく見えず、ヒシクイやマガンなどの群れが飛んで来る気配もありません。結局、雨も止みそうもないので、解散ということになってしまいました。「来年は晴れてね。」と思いつつ、朝日池をあとにしました。

このまま家に帰ったら非常に寂しい1日になっていたところでしたが、帰りに瓢湖に寄り、鴨をたくさん見て改めて可愛いと思い、今年は鴨鍋を食べないことにしようと心に誓ったりして、満足した気分で家に帰ることが出来ました。



餌をとるヒシクイ

これからも、朝日池の探鳥会を続けて欲しいです。今度は天気が良くなるように、祈っております。



朝日池ばかりでなく親子でいろいろな探鳥会にできるだけ多く参加しています。

## 「朝日池の冬鳥観察会」と「寺泊の海鳥を訪ねる」に参加して

北魚沼郡小出町 柳瀬和子

事務局のKさんの車に、主人とともに同乗させて戴いて、朝日池の冬鳥観察会と寺泊の海鳥を訪ねる集いに参加しました。

1993年11月28日、高速道を長岡へ向かうと青空が見えて来ました。これはよし、と長岡ジャンクションで北陸道へ車の向きを西に替えると、魚沼と同じく、米山さんは雲の中、朝日池に着くと横なぐりの雨と風でした。

池の面一杯に浮かんでいたのは、何千羽とも知れないマガモの大群でした。それが一様に風上の西を向いて、波間に浮き沈みして揺れている光景が、まず目に飛び込んできたのです。

皆さんは、マガモには目もくれず？あれがいた。これがいたといろんな鳥を探していらっしやいました。主人のフィールドノートのメモによると、オオタカ、ヒシクイ、トモエガモ、ヨシガモ、カルガモ、コガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ダイサギ、コハクチョウ、マガモ、オナガガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、ヨシガモ、オカヨシガモ、トビ、ノスリ、スズメ、ハシボソの19種、などとなっております。

ビギナーの私のために、朝日池の野鳥について知り尽くされたような方が、スコープで珍しい遠来の鳥を捕えて、どうぞと喋ってのぞかせて下さるのですが、さあ、どれがトモエガモなのかさっぱり解りません。「はあ、あれですね」と一応はご親切に感謝して見えたふりをしましたが、やっぱりよくはわからないでした。

そのうちに、どなたかが、この頸城平野のどこかにヒシクイが休んでいるはずだからと偵察に行かれたようです。もう、このカモの群れを見ただけで感動しておりましたのに、その熱意には頭がさがるばかりでした。

結局どこにいるかその方もつかめなかった

様ですが、また来年の楽しみにしておいてよいと思います。ね、ヒシクイさん。

1994年2月13日の「厳冬の日本海海鳥を訪ねて」の催しも、文字通り、厳冬の日本海の荒波、波しぶき、猛吹雪の中で行われました。山国育ちの私は、荒々しい冬の日本海の姿にわけもなく感激してはしゃいでいましたが、この日もリーダーの渡辺先生や皆さんはあれこれ懸命に探しては見せてやりたい熱意に溢れておいででしたが、荒れるほど港に避難するらしい海鳥たちが、なぜかこの日は少なかったそうです。

それでも、ウミネコ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、ウミアイサ、カンムリカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウなど23種もみられたそうです。

主人が、「いたいた、ハジロカイクグリだ。見ろ」と叫びました。私をからかうのです。いつだったか、カイツブリのことをカイクグリといったのが失敗でした。しかし私はやはり、カイクグリと呼ぶのです。「水底の日暮れみてきし鳩の首」という俳句がありますが、あの鳥は、たしかに水の中をカイクグって暮らしてる、そう思いませんか。

出雲崎港の防波堤の上に、カモメが100羽以上群れて休んでいました。シベリヤから日本海を吹きぬけてくる西風に向かって首をそろえているのは、あの朝日池のマガモの群れと同じでした。

北野地方で繁殖し、冬をこの越後で過ごしている、カモやカモメの仲間が、故郷を恋したうように一斉に西や北の風上に首を向けて並んでいる姿に、なぜか私は涙ぐましくなりました。彼らが、春には揃って北へ帰り、来春には更に数を増やして、私たちの前に姿をみせて欲しいと思います。

私が野鳥の会に入会したのは1993年の6月のことでした。三川村で開かれた県支部総会に参加し、それ以後野鳥の虜になり県内を走り回っていましたがとうとう県外に出ることになってしまいました。実は、ソリハシセイタカシギを見たい、という思いからなのです。1月の初めに末崎氏から電話をもらい、心に熱い物が高まって連れて行ってもらうことになったからです。

1月22日、小雪舞う新潟を離れ、末崎氏と二人で新幹線に乗り、東京駅で京葉線に乗り換え約3時間半、東京ディズニーランドのシンデレラ城を横目にした後南船橋駅を下車、



中央の白い鳥がソリハシセイタカシギ

徒歩5分ようやく目的地である谷津干潟にきました。期待で胸が一杯な私にとって、初めた見る谷津干潟は鳥屋野潟より小さく、こんな所にいるのだろうか？とややがっくりしてとぼとぼ歩いていました。すると盛んにフィールドスコープを覗いている少人数の団体に出会い、なんだか嬉しい気持ちになりました。しかし、その見ているところには居ませんでした。気落ちしているところを末崎氏に見つけてもらい一安心、目的を果たすことができました。

ソリハシセイタカシギは、白と黒の体、そり返った嘴で、それを左右に揺らして餌をとっていました。かなり離れていたのです小さかったのですがはっきり見る事ができ、カメラ

にも撮る事ができ大変満足でした。ソリハシ君は、長くこの干潟に居たせいでスターの座から滑り落ちたのでしょうか？そのおかげでゆっくり心おきなく眺める事ができ、さらに真っ赤な長い足のセイタカシギの美しい姿にも見入ってしばし時間を気にせず酔ってしまいました。

干潟の周囲を回って、嘴の大きく曲がったダイシャクシギを見たり、こちらでは珍しいズグロカモメもユリカモメの中から見つける事ができたり、悪い事ではあるけれどユリカモメが人間から餌をもらって慣れてしまい、30cmぐらいで見られて良かったです。この日は天候にも恵まれ他にダイゼン、シロチドリ、ハヤブサなど計30種を見る事が出来ました。干潟の回りにも野鳥観察のための色々な設備ができてくるようで完成したら又来てみたいと思いました。

野鳥を通して、初めての人たちと同じ言葉を喋り合える事のすばらしさを感じましたが、一方でこんなに狭いところにしか居られなくしてしまったのは、私たち人間なんだと考えさせられたりした一日でした。今回は、新潟では観察しにくいシギ、チドリを1日堪能できました。皆さんも是非、今度は夏羽に変わった美しい彼らを見に行きましょう。最後になりましたが、一緒に同行して下さった末崎氏に大変感謝しております。



カモの群れと休息するセイタカシギとソリハシセイタカシギ

## 藤吉郎の裏切り

柏崎市 小林成光

我が家には食べても食べても太らない太りたくても太らないスリム過ぎる女房と、食べたいけれど親戚一同見回してやはり食べるのが恐ろしい、恐ろしいけど又々食べてしまう常に腹をすかした娘達がいる。高二、中三、中一それに今年幼稚園の4人娘だ。小さな我が家は押すな押すなの女々女々の世界だ。

他にも女はまだいる。ネネ(メス犬)、チャチャ(メス猫)、テンテン(メス猫)、それに半分男のキョンシーという猫だ。半分男というのには訳がある。交通事故に遇い足は折れやせ細り息絶え絶えのところを、後の事など考えない我が娘に拾われてきた彼は、その1時間後動物病院の手術台の上にあった。その後彼の意思とは別に、男を捨ててもらおう手術も一緒をお願いする事に成ったのだ。猫を飼った事のある人は解ると思うが、オス猫は家の中でもマーキングをしてほとんど参ってしまうからだ。退院後彼はゴミ箱あさりの生活を捨て、我が家の一員に成り現在も居る訳だが、どういう訳かあの時チョッキンしたはずの玉ちゃんが半分ぶらさがっているのだ。病院に掛け合ったが、あの時は子猫だったからという事と今度は半額にするからという答だけだった。生活費を圧迫し続けたあの時の去勢料は何だったのだろうか。ともあれオカマのキョンシーを除けば、我が家に男は私一人だけになるのだ。

昨年の秋、小学生の女の子によって我が家にハトの子が持ち込まれた。以前にもハトの子が持ち込まれ逃しても逃しても又帰って来るので、しかたなく遠い遠い他県のハトの沢山いる観光地の近くまで行ってそっと逃した事がある。困ったなァと思いながらも又我が家で飼う事に成った。

我が家のベットの名前付けは大変で、およそ1週間から1カ月かかるのが通例だ。はじめ全員が好きかってに呼び、最後の1つに成るまでには水面下でかなりの戦いや裏取引、談合がくりひろげられるのだ。ところがこのハトだけは違っていた。可哀相に誰も相手にしてくれないのだ。しかし相手にしてくれないという事は、私が勝手に名前を付けても誰も文句はない訳だ。犬がネネで猫がチャチャ、それならハトは藤吉郎に決っている。藤吉郎、実にいい名前だ。藤吉郎おまえだけが俺と同じ男だ。男同士の話をしようじゃないか。

藤吉郎は日増しに大きく成り、ネネと一番の仲良しに成った。顔をつつき合わせて餌を食べたり、よその猫が来ればネネは大声で吠え危険を知らせてくれる。女房がゴミ捨てに行ったりネネの散歩に行こうものなら女房の頭や肩に止って怒られている。私の職場にまでついてきて事務所の中まで入って来ては追い出されている。娘達にも認められ、取り分け四女とは仲良しだ。ただクソには参ってしまう。他人様の新車の上にも平気でやらかしてしまう腕白ぶりだ。そんな藤吉郎が、そんな彼が、事もあるうに先日卵を産んでしまったのだァ!!

発行	1994年3月28日	No.37
発行人	大島 基	編集者 小林成光、末崎 朗
	日本野鳥の会新潟支部	
事務局	〒951 新潟市東中通1番町86番地28	
	☎025-229-2018	本間由紀子方 <振替>新潟1-6002